

## 洞察とオピニオン—哲学対話は社会実装に導くか

中岡成文

私の研究人生はヘーゲル初期哲学(『精神現象学』まで)の「否定性」の理論的・人間的ポテンシャルに魅惑されてスタートしたが、大阪大学における臨床哲学の発足とコミュニケーションデザイン・センター(現 CO デザインセンター)設立によって景色を変えることになった。言い換えると、哲学対話の導入および実践と、科学技術や医療の分野における当事者参加のコミュニケーションとの出会いが、現在の私の活動と思考に大きく影響している。この発表では、少子化社会の課題解決を目指す北海道大学 COI-NEXT(科学技術振興機構支援プログラム)「こころとカラダのライフデザイン共創拠点」に、「対話コンポーネンツ」(堀江剛『ソクラテック・ダイアログ』、大阪大学出版会、177 頁以下参照)の手法を用いて参加している体験を中心に報告する。

本発表がある意味でタイムリーなのは、本学会の昨年度大会シンポジウムで「ELSI と倫理学」がテーマとなり、科学技術コミュニケーションが正面から扱われたばかりだからである。ただ、出発点が少し違うかもしれない。私は「倫理学」ではなく、「哲学対話」の実践と研究の立場から議論したいと思っている。学(ディシプリン)から見るか、「社会実装」から見るかという対置は興味深く、そこで「学術的検討の文脈」と「実践的対処の文脈」を分ける「文脈の分業」の提案(伊勢田哲治氏)は示唆的である(『倫理学研究』第 54 号、15 頁)が、私自身はそもそも倫理学の基本を身に付けていないし、応用倫理学の場数を踏んでもいない。言葉を大切にするのは、哲学・倫理学の訓練でテキストを読み込んだおかげである一方、言葉を現場から探り出すのは、臨床哲学や哲学対話の発想である。言葉は現場に転がってはいない。ふつうの市民にただインタビューし、アンケートを取っても(つまり「オピニオン」のままでは)、少子化問題の解決になかなかつなげるまい。

対話コンポーネンツは社会課題(たとえば少子化)の解決を意識した哲学対話の組合せ(コンポ)である。第 0 コンポで予備調査、第 1 コンポでステークホルダーを集めて問題を絞り込む。核心となる第 2 コンポ(ソクラテック・ダイアログ)では当の社会課題やキーワード、それにまつわる情報や専門知識をいったん棚上げして、身近な対話テーマを設定する。たとえば「相容れないものと共に生きる」というテーマで、参加者が想起し合う経験の中から選んだ一つの「経験」を、徹底的に全員で掘り下げる(だから「空中戦」にならない)。それにより、少子化にまつわる定番の言葉のやり取りや立場の違い(そもそも子どもに関心がない人もいる、など)を超えた次元の普遍的な気づき、「洞察」が達成できる。第 3 コンポでその気づき、洞察を社会課題に再びフィードバックして、何らかの方法論や提言を得ようとする。

哲学対話は、展開が誰にも読めないという偶発性があるために、「面白い」のだが、社会実装をめざす研究プロジェクトでは、主催者は一定の「アウトカム」に向けて対話のある程度計算づくで進めざるを得ない面がある。社会課題からつかず離れずのテーマの設定、市民の多様な属性を代表しつつ個性の光る対話参加者の選抜、偶発性を適度に生かしたファシリテーション、対話の成果の社会実装に向けたフィードバック……。はたして「社会実装」は金科玉条のように唱えられるべき目標なのかという疑問はひとまず置こう。哲学対話を通して社会課題にアプローチする有効性や工夫、対話の基本的限界(言葉を使うこと、流れに左右されること)を多少とも超えるモデルの模索等について、検討したい。